

ICTを活用した国語科授業のあり方

国語科 大迫 公見子

1 研究のねらい

- (1) ICTを用いた効果的・効率的な学習指導を具体化するための単元構想を行う。
- (2) 「主体的・対話的で深い学び」に寄与するICT活用のあり方について考察する。
- (3) ICTを活用した授業を継続して行い、その有効性と今後の課題を明らかにする。

2 研究経過

(1) 研究主題に関する考え方

文部科学省による『教育の情報化に関する手引き』（2010）にICTの活用は「教育効果が期待できる指導方法」として取り上げられている。その中の「教科指導におけるICT活用」として、授業の中でICTを効果的に活用し、指導方法の改善を図りながら、児童生徒の学力向上につなげていくこと、またICTを「有効、適切に」活用することの重要性が示されている。情報社会の進展とともに、教育においてもICTの効果的な活用と指導法の改善が求められている。しかし、これまでの自分の授業実践を振り返ると、ICT活用の必要性を感じながらも、活用頻度が少なく、その有効性を実感するまでに至っていなかった。本研究では、継続的な実践を通して教科指導におけるICT活用の効果を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の視点

以下の2点に研究の視点を集約する。

視点1 効果的・効率的な学習指導のためのICT活用

視点2 「言語活動の充実」のためのICT活用

視点1「効率的な学習指導のためのICT活用」については、主に授業者の行う教材の準備や授業での展開における工夫について考察、実践を行った。国語科の授業におけるICT活用により期待される効果として、以下の点が挙げられる。

- ① 生徒の実態に応じて、教員が創意工夫した提示資料を作成し提示することで、学習への意欲が高まり、作品や作者、作品の背景への興味や関心が生まれること。
- ② 画像や写真データ、動画などを取り入れることで視覚的、聴覚的に理解を深めること。
- ③ ICTを用いて作成された提示資料は再利用や共有がしやすく、それによって準備時間を短くすることができること。また、校内のサーバなどに保存し、教員間で共有すること。
- ④ 教材や資料をスライドにしてあらかじめ用意し、適切なタイミングで提示することで、板書にかかる時間の短縮を図り、間延びせずテンポの良い授業展開が可能になること。
- ⑤ 授業で線引きや語句の囲み作業を行う際、口頭での指示と比べて、生徒が画面を見て視覚的に場所を把握できること。

⑥ 資料を提示する際、前画面に戻る、スクロールするなどの操作により、簡単に前の授業場面を振り返ったり、授業全体の流れを確認したりすることができること。

実際の授業での実践を通して、これらの効果を確認、検証し、今後の課題について明らかにする。

視点2「言語活動の充実のためのICT活用」については、ICTを言語活動の場面で活用することの意義について考える。平成28年12月21日付の中央教育審議会答申において、次期学習指導要領改訂の方向性が示された。その柱の一つが「主体的・対話的で深い学び」の実現であり、この視点は、国語科の指導において、言語活動の充実と方向性を同じくするものである。単元や題材のまとまりの中で効果的な言語活動を設定し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に寄与するICT活用の在り方について実践し、その有効性について考察する。

(3) 研究の実際と考察

I ICTを活用した授業実践

本研究を行うにあたり、ICT活用のための授業ではなく、各単元で設定した目標を達成するためのICT活用であることが重要であると考えた。したがって、継続的に毎回の授業でICTを活用し、振り返りを行い次の授業での改善につなげるというサイクルを進めた。以下に、そのようにして構想した単元の一つを例として挙げる。

ア 単元名 「史話を読み、戦国時代におけるリーダーの思いを考える。」

イ 教材名 「鶏口牛後」〈十八史略〉(大修館書店「新編 国語総合」)

ウ 単元の指導計画(全4時間)

| 時 | 学習活動 |
|----------|---|
| 導入 1 | 1 <u>単元の学習活動と目標を確認し、見通しを立てる。</u> 2 中国の戦国時代について、 <u>時代背景や当時の状況を大まかに知る。</u> 3 <u>全文を音読し、漢文の訓読に慣れる。</u> 4 第1段落を中心に、蘇秦の行動について理解する。 |
| 展開Ⅰ 2 | 1 第2段落を読み、同盟を締結するにあたって蘇秦が説いた内容について理解する。 2 時間の流れに沿って、本文の内容を整理する。 |
| 展開Ⅱ 3 | 1 蘇秦の言葉から、 <u>諸侯がどのような思いを持ったか考え、話し合う。</u> 2 <u>戦国時代における諸侯の生き方について考え、まとめる。</u> |
| まとめ 4 | 1 <u>六国合従後の史実を知り、「合従連衡」の言葉の意味について理解する。</u> 2 遊説家としての蘇秦の評価と人物像について知る。 3 「鶏口牛後」という言葉から、自分の生き方について考える。 |

※波線部はICTを活用した部分(スライド資料の提示・画面への線引き・書き込み等)

エ 単元におけるICT活用の実際

活用の方法

「パワーポイント」や「ノートアプリ」を使用して作成した提示資料をスクリーンに投影する。また、タブレットとペン機能を活用し、画面上での線引き作業、手書きでの書き込みなどを行う。

(導入1) 単元の学習活動と目標を確認し、見通しを立てる。[資料①]

単元の目標や学習活動について、口頭で説明するだけでなく、スライドを作成ししばらく提示しておく。視界に入る時間が増えることで、その後の学習活動においてゴールを意識しながら学ぶことが期待できる。

視点1-① 効果的・効率的な指導

(導入2) 時代背景や当時の状況を大まかに知る。[資料②, ③]

「戦国の七雄」や「六国合従」の内容について、地図や写真、模式図を使い提示しながら説明する。教室全体で資料を共有し、視覚的な理解を促す。

視点1-② 効果的・効率的な指導

(導入3) 全文を音読し、漢文の訓読に慣れる。[資料④]

教科書の文章をスライドにして大きく映し、全体に提示する。その際、重要な語句や句法には印を付ける、ラインを引くなどして目立たせる。また、生徒の理解度に応じて、返り点や送り仮名を伏したものと白文だけのものなど、レベル別のスライドを作成し適宜提示しながら読む活動も行った。

視点1-④ 効果的・効率的な指導

(展開Ⅱ-1) 諸侯がどのような思いを持ったか考え、話し合う。[資料⑤, ⑥]

グループ活動を行う際、話し合いのルールをスライドにまとめ、全体に提示しておくことで、生徒が今何をすべきか確認し、話し合いの流れを意識した活動ができるようにした。また、個人やグループの意見を全体に発表する際、画面上に手書きができるペン機能を使い、意見の根拠とした部分に自分で線を引きながら説明する活動を行った。これにより、資料の中の重要な部分(意見の根拠)を全体場で確認することができた。さらに、その場で他の視点からの意見が出され、生徒の思考の深まりを感じた。

視点1-④, ⑤, ⑥ 効果的・効率的な指導

視点2 言語活動の充実のためのICT活用

(展開Ⅱ-2) 戦国時代における諸侯の生き方について考え、まとめる。[資料⑦, ⑧]

考え方のポイントや出された意見をスライドにまとめて、画面上に大きく提示する。さらに生徒の意見を集約し全体のまとめをする際、ペン機能を活用し手書きで書き込みをする。

視点1-④, ⑤, ⑥ 効果的・効率的な指導

視点2 言語活動の充実のためのICT活用

(まとめ1) 六国合従後の史実を知る。

史実や人物を紹介する書籍や漫画の画像を提示し解説するなどして、教科書本文の読解から、後日談や史実との関連に興味を広げる。

視点1-② 効果的・効率的な指導

以上のように、ICT機器を授業で日常的に活用することで、単元の全体を通して効果的・効率的に学習を進めることができた。また、特にグループでの話し合いやその後のまとめにおいて、口頭発表だけで済ませることなく、ワークシートを投影し見比べたり、出された意見に対し全体の場で補足的な書き込みをしたりしたことが、視点2に挙げる「言語活動の充実」の実現に寄与したと考える。

II その他のICT活用事例

現在、Iで挙げた単元における事例以外にも、国語科授業の中で継続してICT機器を活用し、より効果的な活用法について模索しているところである。以下に、実践している種々のICT活用法を、そのねらいとともに挙げる。

ア 授業の受け方、読解における線引き作業のルールなどを示したスライドを投影する。またこのスライドを授業において必要なタイミングで繰り返し提示することで、適切な授業の受け方を生徒に意識づける。[資料⑨]

イ 1時間ごとの授業の流れや時間配分を見て分かるように提示し、見通しをもたせる。また授業の山場や重要な項目について知らせることで、授業への意欲的、積極的な参加につなげる。[資料⑩, ⑪]

ウ 教科書をそのまま写真データとして取り込み、画面上で線を引いたり補足説明を書き込んだりして授業を進める。授業者が口頭で指示するよりも、線を引くべき箇所が一目瞭然であり効率的である。[資料⑫]

エ タブレットのカメラ機能を使い、生徒の記入したワークシートをその場で写し、画面上に大きく映し出し、全体の場で共有する。実際の生徒の記述をもとに必要な補足説明を行い、また評価をすることができる。[資料⑬, ⑭]

オ グループ活動の発表の際、ワークシートをそのまま映し出し、グループごとの意見を見比べて考察を深める。複数のワークシートを一つの画面に映すことで全体を俯瞰してまとめの活動を行う。[資料⑮]

カ ノートアプリ内の画面に複数の資料を貼り付け、デジタル黒板として活用する。画面の範囲は無限に広がるので、資料を何枚でも配置し、余白を使い黒板と同じように書き込みをすることができる。スクロール機能を使い、前の資料に戻ったり、資料を比較したりすることも容易にできる。[資料⑯]

キ 古文の文法学習において、問題形式のスライドを作成し、授業の中で適宜示しながら扱う。重要な事項を繰り返し確認する機会を増やすことで、効率よく知識を定着させることができる。[資料⑰]

助動詞活用一覧表など、何度も参照する資料を全体に映し出して解説する。また、文法指導における使用場面の多い、活用表の枠をあらかじめ作成し、必要に応じて書き込みを行う。黒板に手書きする時間を大幅に短縮することが可能である。[資料⑩]

ク 漢文の句法や語句の学習において、例文を画面上に提示し、授業の最初に音読する。最初は訓点の付いたものから始め、慣れてきたらそれらを消して白文読みするなど、段階を踏んだ活用ができる。生徒の理解度に合わせ適切なレベルのスライドに切り替えながら活用することもできる。[資料⑪]

III 今後の課題

授業におけるICT活用の今後の課題としては、教師の意図的な誘導や効率を追い求めるがゆえの「学習の質」の問題がある。作成したスライドをゴールにして、強引に生徒の意見を誘導することは、生徒の主体的な学習を阻害する要因になってしまう。

画面が何度も切り替わることで、生徒の思考が途切れることのないような、授業の展開や画面の見せ方の工夫が必要になる。じっくりと教材と向き合い、思考を深める時間も大切にしたい。

次にICT機器の操作の習熟という課題がある。機器の操作に手間取り、授業の雰囲気崩れる、教師の視線が下がったままになる、授業の流れが滞るなど、目標に到達させるにはほど遠い授業になる場合がある。教材の綿密な分析、授業の組み立ての工夫など、操作の習熟を含めた授業技術の向上が重要である。

3 研究のまとめ

ICT活用は、生徒の授業に対する意識の高まり、効率の良い指導や言語活動の充実に効果があると考えられる。中でも国語科の指導においては、語句の確認や線引き作業が目に見える形となることで学習効果が高くなると思われる。古典文法や漢文句法等の定着指導においても効果が出てきている。また、黒板は一旦消すと復元不可能だが、ICT活用により、対象となる資料をすぐに教室で提示することができる。これは前時の振り返りや理解が不十分であった部分の復習、さらには異なる単元であっても共通する学習活動の説明を行う際に大変有効であると考えられる。今回、ICT活用を「効果・効率」と「言語活動」の二つの視点で考えたが、本来この二つは相互に関連するもので、一体となり成果につながるものである。また、当然ながらICTを活用さえすれば生徒の学力が上がる、というような簡単なことではない。実践する中で出てきた課題もあった。機器の活用と従来からの授業方式の利点を整理し、今後も継続的な実践を行う中で国語科指導の在り方を考えていきたい。

4 参考文献等

- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』平成22年 教育出版
- 文部科学省『教育の情報化に関する手引き』2010年
- 中橋雄・佐藤幸江・寺島浩介・中川一史『説明文の読解に電子黒板機能の有無が及ぼす影響に関する事例研究』2011年 教育メディア研究 17 No.2 pp.41-51

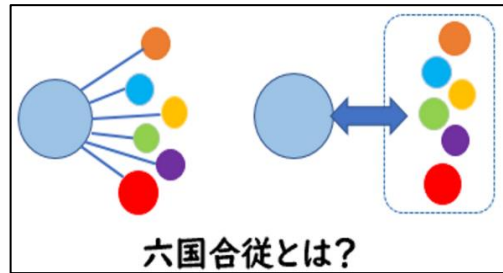
資料①

今日の課題

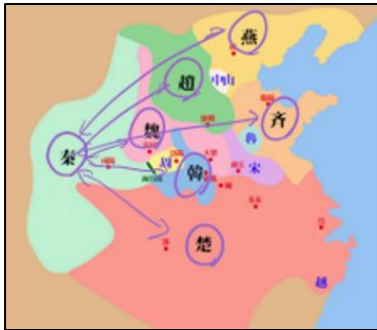
諸侯はなぜ「鶏口」を選んだのか？

その理由を探り、戦国時代のリーダーの
思いを考えよう。

資料②



資料③



資料④

「諸侯之卒、十倍於秦。
併力西向、秦必破矣。
為大王計、莫若六国從親以
擯秦。」
肅侯乃資之、以約諸侯。
蘇秦以鄙諺說諸侯曰、
「嘗為鶏口、無為牛後。
於是六国合従。」

資料⑤

グループ活動の進め方

| | |
|---|---|
| 3 | 1 |
| 4 | 2 |

(1) 自分の意見を、1→2→3→4の順に発表する。

(2) 全員で話し合い、グループの意見をまとめる。

(3) グループとしてまとめた意見を発表する。
(発表者は2番の席の人)

資料⑥

・小さな国でもトツプでいたい。
・大きな国に従属したくない。
・祖国と人民を守りたい。
・自分と祖国（祖国の兵・人民）に対するプライド
・国を守らねばならない
・続けなければならぬ
・責任感

資料⑦

諸侯が「鶏口」を選んだ理由

a 秦との関係
(国力がどうだったか。)

事実関係

b 蘇秦の言葉に諸侯は何を思ったか。

諸侯の思い(心情)

資料⑧

「王様が秦に仕えれば、秦は必ず
宜陽(ぎやう)を、成卒(せいしゆ)を
欲しいと言ってくるでしょう。
今年、土地を割いて与えれば、未
年もまた割譲を迫るでしょう。与
えれば、もはや与える土地がなく
なり、与えずは、今までのことは
無駄になって、さらに災いを受けます。
王様の土地は限りがあるのに、
秦の要求はやむことがありません。
限りのある土地で、とまる
ことのない要求に与えようとする
のは、恨みを買い、禍を招くとい
うもの。争わずして、土地は割
れます。これでは、『きんしん
口どき』のやうな状態になります」と申します。今、面を向いて手を
合わせ、秦に臣服するのは牛の尻
になるのと何の差いがありますよ
うか。王様の賢明は、鶴の雛鳥は
土草がありながら、牛の尻と呼ば
れるのを、恐れながら私は王様の
恥辱であると存じます」

